
ソーダ水と天輪廻

もじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソーダ水と天輪廻

【Zコード】

N4733Y

【作者名】

もじ

【あらすじ】

試作、思索、詩作する日々。

(記念日または月いちで更新)

ラムタの日々（前書き）

ある朝の事。

どんな昨日を過ごしても今日はやつて来る。
ぐずぐずしていたら乗り遅れて、明日に追い越されてしまひだらう。

（2010／11／11）

同じつくりのからだを持つ。葉脈のよつて複雑に巡る思惑に、神経が逆撫でされて心がささくれる。

「なによもう。いつまでも思春期みたいな事言つてないで、ちゃんと一人で起きてよね」

「彼女はなにひとつ分かっていない。このよのなかの事を。この命の事を。」

同じつくりのからだを持つ。そこに生きる意思を、そこに息づく思いを、果たして本物であると断言できるか。

まどわされず、流されず、どうして真っ直ぐに生きられない。

「ねえ。またご飯食べてないんでしょ。チャーハン作つてあげるから。ちょっと待つてて」

その手は宇宙をつくりだす。なんて傲慢で無謀で、尊大な両手だ。なのに、同時に尊い。

すべてのものが多面でなく複雑でなく、一つの真理しか持ちえないものならまだ簡単だった。

彼女はその指先でたやすく瑞々しい命をむさぼつていいくのだ。臆面もなく屈託もなく。そして何の疑いもなく、朝から味の濃すぎるやきめしを作るのだ。

「文句あるなら食べなくて良いのよ。ていうか、どうしてまだ着替えてないの」

どうして。その疑問符は昔から智恵のある者の特権だという。人は考える芦だと誰かが言つたが、それは果たしてほんとうの事だろうか。考えるという行為を考えてみると、人はたいして考えていなといという事実に驚かされる。いいや、それは確かに言い回しではない。たいして考えていない人が大半で、多数派で、それで世界はのびのびと回っている。

つくりだす事に関しては別だ。人はその才能において天才である。

曲がり角を曲がれば問題にぶつかる。人生とはそういうものだと誰かが言った。

「ほひ。これなら着れるでしょ。もう。洗濯ぐらいうちやんとしてつて言つてるのに」

同じつくりのからだを持つ。性差はさほど問題ではない。しかしここぞという時に、決定的な打撃を与える。それが性というものだ。人から煩惱を取り去れば即身成仏になれると言うが、そこに果たしてほんとうの幸福があるのだろうか。何をもつて何を為すのか。誰に頼り誰に救われ、誰を癒すのか。

ゆるやかな曲線を描く高速道路に、猛スピードで突っ込んで曲がり切れずに入破する。それと同等の無知を武器にして、生き続けている。

呼吸をする。一息」と世界の淀みを内側に引き込んで、やつと安心出来る。小さな宇宙はいつだつて繋がりを求めている。意識的に、無意識的に。

希望というものはほんとうに輝いているのか。それは時にはミラーボールのように不躾で、夕日のようにじんわりと、先を照らすものなのか。燐々と輝く太陽は空にあるがそれは胸の内にあるものだ。

「ね。おいしい？」

「うまい」

「そ。良かった」

ミリ単位の修正を、躍起になつて施している。はじめからつくり直さねばならない事を知りながら、その難難さに目をつぶつてしま

う故だ。歩んできた足跡は誰にも消せない。徒労に過ぎない毎日だと切つて捨てる。それだけの価値だ。細切れの椎茸は、人の存在と重なるところがある。

彼女はなにひとつ分かつていない。可能性という言葉を信じ、真っ直ぐにそれに手を伸ばす。その大胆さは時に勇気と呼ぶのだろう。「ええつ。結構細かく刻んで入れたのにつ。やめてよ。それだけ残さないで」

押しつけがましく苦々しく自分はここだと主張する。やせしれは半分が押し売りで出来ている。

しかし残念ながら、それが正しくやさしさだ。だからこそ簡単で難しい。

飛翔の篝火（前書き）

何を探す。
何を目指す。

生まれて来た意味を。 その鼓動の意味を。

飛翔の篝火

吹き荒ぶ荒野。視界を覆うのは己の臆病が故か。
ちりちりと焦げる鋭角な大気に燃え、砂塵が尖った宝石のように
閃いて通り過ぎる。

ゆるりと顔を上げる。深い闇は濃紺の薄膜を纏い、銀色の月が煌々と己心の孤独を照らしている。薄汚れたマントの首元をかき抱き背後を見やる。同じように身をかがめながら歩く、ひょろ長い影に向かつて声をかけた。

「己の先だつたな」

月を背にした影から薄暗い声が響く。

「はい確かに。『西に四十六、北へ百一十九。月下の路傍の先。星が嘶く黎明より半歩、南』この先にござります」

目指す地は近い。

何故その場所を目指すのか、そこに何があるのか。明確な答えを持たないままに荒野へ出た。いつからか動乱に巻き込まれ、命をとられる寸前今まで追い込まれて逃げていた時、この影に出会ったのだ。

影はおれを知っていると言つた。おれ自身も知らぬおれの正体を、知つていると言つた。

何かを得る為に、何かを失つた。そう考えるといつも泥臭い迷路に迷い込む。

失つたものと引き換えに得たものさへ、いつしかこの手の中から霧と消えた。朝露の美しさを知る前に。

「Jの旅路のなかで、おれはただ歩き続けていた。

どJが終焉であるのかも分からず」。

雲半『南天の実』

「重さ」

途切れない糸のその先は
光よりも尖つっていた

遊んでいる命なら
うたをうたえと言つた

光を知らぬ地底のいきもの
闇に生きて目を持たぬのに
わたしよりも眞実を知る

* * * * *

「甘露の忘却」

刻々と削りとられる命に
嘆いている暇はない

真夜中 背後を振り返る

闇に浮かぶドクロ
すべては無知による

* * * * *

「冷や汗」

自分を良く知る人が
自分を知らないという
仲の良い友人が
突然よそよそしく笑う
そんな夢をみて飛び起きた午前3時頃

* * * * *

「止まらずに」

虹が走る 青いカンバスの上に

君の涙が溶ける
光が弾け 光が目を刺す
走れ 走れ

背中を押すのは
ありし日の想

* * * * *

「ひとりぼっちの週末」

灰色の世界に落ちる冷たいものは
心の中にまで染みをつくりつた
はじまりを探して手にしたものは
風の尾の先へ消えた

いつだつて吠えているけれど
ゆくさきを知らずに走っているだけ

冷めた飯ほど
つらいものはない

* * * * *

「どうなるものでも

にび色の空に
縦横に伝う導火線
ゆううつな踵
すり減つてゆく今日

* * * * *

「空など飛べない」

走れずに ただ空を見上げる
高く遠い その音色

枯れた大地に種をまくのと同じように
今日を生きなけば

* * * * *

「理想と現実」

淡雪のような情熱
大切にはぐくむ星の欠片

淀んだ日々にもたらされる

甘すぎる幻覚

僕はとても愚かだから

両方をくらべてはため息をつく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4733y/>

ソーダ水と天輪廻

2011年11月27日21時51分発行